

めぐみしる大内山のまつのうへにふたゞひ千世の色やみすらん
どいはひたまひ下されたるに

二度の千世をば君にゆづりおきてめぐみをまつの陰にかくれん

此詞書拙あり

題まらず

袖の上におちたるみれば雲井どぶたづのくはえし稻葉なりけり

くはえし俗あり

三條の君より實房公の御集を給はりてこの中より御影の

うへにゑるしねかるべき御歌えらびてよどありければ撰

みて奉るにかいそへたる

漢屑だにまじらばこそはえらびても清きなごさの玉のひろはめ

詞書のためはりてはたまひてと云ふべしたまはりてと云ふと

ころならず

富小路左兵衛佐の君より山吹に御歌をへて賜はりける御

返し

やまぶきの花にむすべることのはの露はこがねの玉にざりける

山吹を黄金にたとへて云ふは俗意なり古くその例なし

或人の四十二の除厄を賀して

のぼるべき千とせの阪もまら雲のよそぢの上にみえわたるかあ

詞書の賀の字つかひやう非なり

旅

あしびきの山こえねこえこえくれと旅はうきやといふ人もあし

問ひかくるやをつゞく詞よりうくるはいみじき誤なりこゝは

うしやと云ふべきところありよく人の知れる我かもふ人はあ

りやあしやとの歌考ふべし

蔭山秀雄霜月ばかり君の御使にて江戸にかもふさける馬
のはあむけまはるついでによめる

かもふなよわかれんほどは遠けれど限はみえしむさしのはら
みえしいか

磯野直章が信濃國へかへりける餓しける夜

たちかへりまたおどづれよ村時雨いくたび袖はぬらすともよし
いくたびいか

寄鳥述懐

心せよ鶯のあさりの下にどり世のわたらひもかくこそあるらし
さぎのあさり此詞さつかず

行路述懐

踏馴れし山の岡邊の道にかふるあなづるにこそつまづきにけれ

何をあまづるにかたしかならず

夏無常

ちりぬとも惜みける哉はちす葉の下にむすべるみをまらすして

一二句てにをは打合はず初句俗にちつてままふとても意二
句はをしんだことかゝの意なり一二句つゞけよみて其非を考
ふべし

仙院崩御をかこみ奉りて

限ありてかりぬの雲井ふたゝびはいかなる空にうつりましけん
二句造語いかゞ又詞書のかしこみいかゞかくては俗言に同じ
さいひやうあり

龍

天雲のよそにさかめや世中にたつといふ名もかくこそあるらし
云ひおほせず

懸想文賣のかた

これをみよ花なき里にすまばこそつばさにかけん文もたのまめ
意たしかならず

職人づくしの白拍子くせまひの圖

かへすまはますらを花の袖なれどなまめきなれし癖はみえけり
いひおほせず

紅葉狩と云へる舞の圖

かざりわれは醉をすゝめしもみぢばの炎もさえし秋のまもかな
いますこしいひおほせず

蘭に蜻蛉をり

ゐてはたちたちてはゐてふ草の上に羽もやすめぬ秋のかげろふ
ゐてふ草の方にはかくてよろしけれど、こゝは二方にかけて云
ふなれば、居の方にてはいかゞ、但居はやちまたにては、一段活な
れば、ゐてふとも云はるべけれど、さる詞づかひたはて見及ばず
翁稻を負ひて田づらをゆく、童あどに従へり、そのわらは鮎
子を草にさして打見もてゆく圖
かい人のやしなひ草にとりそへん年あるあきの小川のいろくづ
鮎は田中に生ふる魚にあらず、三句とりそへんと云ひては、此贅
者かく云ふことになりて、一首の意きこゆず
布袋空を打見たる
あまりにもそのあかつきは遠ければまづ此くれの月やまたまし
あまりにも俗なり

天台の石橋にて獅子の子を試るかた

ふさおろす谷ふかみ草ひるがへりのぼるも風のちからなりけり

一首の意もたしかならぬ上に獅子に牡丹もいとく俗意あり

静女

松の上にあふとはすれど鶴がをか雲井こひしき音をやなくらん

かくては静が樹上にて舞ふやうにきこゆ

瀧尾社

おちたぎる瀧のをにこそみだれければみあかみのあせる白玉

初句おちたぎちと云ふべし

この作者今の世の上手とて人々もてはやすめれど、たゞ才氣あるにまかせて、古人のよみのとせるめづらしきふしを旨とつとめてよみ出でんとするまゝに、一首のあらまに聊意を用ひず、つゞけが

ら雅俗混亂して、歌のさまを失ひてにをは語格をさへ誤れる、あまた見ゆ、ざるを上手上手と云ひさわ々は、無下に此道知らぬ人の、大方雷同して云ふにぞあなる、若此よみ口をめたしと思ひて學ばんとせば、忽大澤中におち入るべし、あはれ世は盲千人めあき千人あるかな、可嘆

嘉永六年十二月十四日

双木山人

真間紅葉見の記

歸園日記

眞間紅葉見の記

歸國日記

はしがき

眞間紅葉見の記は兒山紀成イナギの作なり、此本の原本は作者の子紀言イナギの
自筆にて、宮崎成美の續視聽草稿本に入りたる由、寄送者瀧川龜太郎
氏書添へられぬ、末の方にすこし直し、ところあれど、其方中々にま
どろなれば、今はもとのまゝになし、かきつ、同遊者は菅沼斐雄フエノ、朝岡泰
任チカ、石田孝一イシダ、本田夏香、及千城、皆景樹の弟子なり、千城の氏は知らず、紀
成の傳は桂園叢話第一篇に見えたり
歸國日記は熊谷直好ナカヨシの作にて、千葉胤明氏より送られぬ、直好通稱を
助左衛門といふ、周防國岩國藩の士、よて、京師に上りて歌を景樹より學

二
びぬ、文中又見えたる木屋町ある大人はやがて景樹の事にて、嘉之山
本親民チカトモ（波多野）本下幸文サチアキは皆同門の人々あり

真間紅葉見の記

兒山紀成

神無月四日、これかれ云ひあはせて真間の紅葉見に出立つ、栗園につ
どひて、夜ごめにちど云ひたれど、兩國にて日出でたり、打向ひて取敢
へず、斐雄

もみぢ見にいであつけふの大空にまづてりのぼる朝づく日かな
日は出でながら、朝霧いと深く立ちこめて、何のあやめも見ねわかず、
橋を渡りて、たのれ

ふみからし渡る橋さへみえぬまでふかくもたてるけさの霧かき
行くべき道はいづくよりと問ふに、此川に付きていづく迄も一筋を

りといふ又たのれ

たて川のふたつめ三つめ數ふればいやのぼるきりさかざるの里
ゆく／＼、孝一

思ひたつけふは日もよし道もよしこゝろのまゝに遊びても來ん
漸にして逆井の渡に至る、干城

ふりにけるあどみんとて葛飾の中のなかゞはこえつゝぞゆく
こゝより家あるところは離れて、稻刈りほせる田づらの道の淺茅踏
分くるきど旅めきてめづらし、霧はいつの間にか打晴れて、筑波の峰
いちじろく見ゆ、夏香

かりがねのなき來る、空は遠けれとめに筑波山まゐるくぞありける
二荒足尾もさかやかよ見ゆ、願すれば霧の中に富士の山あり、あな／＼
といふ内に、氣色さへかはりて、云ん方なし、干城

白雪のふりかさなれる富士のねはきりの中にもさやけかりけり
あはれたのれもど、かつ仰ぎ、かつ傾きたれど、さま／＼にかはりゆく
氣色の面白さには、中々心も漂ひて、ともかくも得云はずなりぬ、小松
川の里に富士屋といふありけり、まばしはと人々入りてやすらふ、か
しこの白酒にはあらず、ひささの酒くみかはすほど、時や、うつれり、
斐雄

春さればひくや子の日のこまつ川岸もつむべきところなりけり
泰任

さしてゆく眞間の紅葉はくみかはすたが面にもまづ予よはへる
皆人興に入りて立たんともせず、たのれみそかに彼瓢を取りて出で
たり、皆人追來れり、足に任せてゆく／＼たのれ

残りたるひさをもてば皆ひとのこゝろはたのが方にこそあれ

彼家にては小松をとめを肴にて、面白く怪き歌ども多かりきとある、人々包みていはず、せちに乞ひければ、今かくよめりとして、泰任

賤の女がうつから棹のからき世にたのしきけふのみち狩かな
さても此人々の此儘にて遠き旅路に出でたらば、世に何の願かあらんなど云ひそゝろく、殊に今日は天氣いとよくて、更に冬枯のこゝちもせず、鳴渡る雁、打靡く尾花まで、心にかなひてたゞならず、市川の關を越えて、船待ちをるほど干城

小とね川くだすいかだのみなれ棹なれてもねふるをしのむら鳥
利根川のみをさかのぼりこゝ舟はまつどの里やとまりなるらん
同じところにて、孝一

去もふさやまゝのやま風松ふけばむかしの涙のねとかと予きく
舟よりあがれば真間の里あり、やがて怪き板橋を渡る、こを里人は繼

橋とよぶめり、其名ばかりは朽残れりといと悲し、干城

かつしかのまゝの繼橋たえはてゝ、みることかたき昔を予ねもふ
夏香

ふみわたるまゝの入江の板ばしは、そのつぎ橋のひとつなるべし
ねのれ

かたりつぎいひつぎ今もいにしへにかゝりてくちぬまゝの繼橋
又さびたる入江の傍に手兒奈の社あり、そこにたりひて遊ぶ、斐雄
かつしかのまゝの入江の花すゝきふりし乙女が袖かど予ねもふ

泰任

葛飾のまゝのふるあと来てみればみやむさびしく松かせ予ふく
ねのれ

枝たれてふる江にたてるねい松はてこなの神のむかしをやる

すべて此わたり紅葉いと稀あり、弘法寺の庭に大なる楓二本立てり、世にはこれのみぞ云ふある、斐雄

涙こそはをげちとあれ、もみぢばは昔のまゝのにしきなりけり、後の山づたひ總寧寺よ詣づ、こは古戰場よて、里見某の城跡あり、法師のあなひにて登る、遠き山々廣き武藏野一目の中に見渡さる、國府の臺と云へるもうべなりけり、さかしき此山ふもとの利根川より敗れぬ、どその時の戦今見る如く、説經者、普度那の舌をふるひて語る、夏香貝鐘のふきわはせけんやまゝ、つの嵐のおとのすこくもあるかな、おのれ

ものゝふのこもりし跡はふる寺のむかしがたりとなりよける哉、禪堂よ入りて休らふ、孝一

まことにもうき世の中をすてんにはかゝる處にあるべかりけり

こは心に思ふ事あればあるべし、とかくしてあざむき出でたり、彼子又よめる

ふゆの野の風のたえまの色す、きうちかたぶきて何おもふらん、山を下りぬれば午過きたり、市川の里よて、晝飯たふ、酒ものみたり、行徳より船に乗らん、と堤づたひよ急ぐ道にてよめる、朝岡泰任

ほのかある梶の音よも知られけり、蘆のなかゆく利根のかはぶね、斐雄も

手よつみてみるもめづらし、冬枯のあざぢが原のやまとあでして辛うして行徳に至る、さては船をと尋ぬるよ、申過ぎぬれば一艘も侍らず、今は日も傾きたれば此里に宿りたまへ、さらずば暮れぬ間よかけまゝの渡といふを早く渡りても、どの逆井に出でたまへ、とくくといふを聞きて、人々力落としてけり、さればとて其かけまゝの里を

れふ、日の暮れんとするに驚きて、殊にも足の痛うなりければ、たのれ折にあひてうらやましきは久方のくもゐの雁のつばさなりけり

日はやゝ山の端に入りなんとす、足は人よりかくれたれど、斐雄
ゆふづく日かくるゝまゝに現れてうちなびきたる富士のとは山
夏香ぬしも

ゆふ月の影さすまゝにかつしかの廣田はきりのうみとありにき
暮れはてゝ、逆井にて船借りて乗る、月の影をも乗らせたりなど、又け
ふのつかれをさへ打忘れて、孝一

あそびつゝ、船出をせればゆふ月のかたぶくまでになりける哉
をし鳥のはやねよけらしなく聲のきこえぬ川につきぞすみける
とかくする程日は暮れ、出でたる月さへ入りはてゝ、戌ばかり兩國に
舟はてぬ川風身にまみ渡りていとゞ寒ければ、又このわたりにて休

らふ、いかばかりのまうけとどかありけん知らず、孝一とこのれは、歸
る道なほ遠ければ、たゞいそぎに急ぎて、暗きまぎれに別れんとす、お
のれ

はこねやまさして入りよし夕月の影いまさらにてひしかりけり
さて急ぎぬれど、夜いたう更けて家に歸り侍りぬ、こは其日の興あり
しいさゝかの端を擧げて記しおき侍るものになん、又後の日改め見
て筆を加へ侍らん

文政四年神無月

愛松軒なるのりまげゑるす

歸國日記

熊谷直好

鎌倉の印宗大徳は昔より我師あり、今年しも京に登りたまひ、相國祥天寺にして碧巖提唱したまへば、己も結縁のためにとて、遷佛場に入りて、大衆と同くものし侍り、なほ夏の末までと思へど、み暇限あれば、此五月十九日といふに彼寺を出立つ、禪師いたう老いくづをれ給ひて、み病にさへたはすれば、又拜み奉ることもしと、かほつかなくて、悲しといふも更あり、八年ばかり昔天龍寺にたはせし春、己が歸るを送りたまひて、長き別とおもふばかりぞ、と遊ばせしは、さもあらざりしに、此度こそ實に長き別なるべけれ、と思へば、涙さへと、めがたし、抑

雨の中にて空もかきくらしたるが、今朝いさゝか小止みたる程あり、
 木屋町ある大人の御許に至る、此二十日はかりたまりたる物語ども
 あり、此間に雨いたく降り出づ、去りし十五日より雨いさゝかも止ま
 ねば、鴨川の水いと高し、木津桂などもいたく溢れ出で、伏見の舟も
 十八日よりはず、陸地も通絶たりと聞けば、せんかたあくて留れ
 り、其後日に日よいやふりに降りまして、一日片時もやまず、やうく
 きのふけふすこし日の影見たり、伏見の船は猶出ですと聞けど、い
 つを限と見ゆべきならねば、強ひて出でたつ、今日二十六日申の初
 刻あり

としとにわかれなれたる別だにわかる、時はたゞならぬかな
 嘉之親民の主たち大路まで送りたまへり、道の程夕立めきて北山の
 方いたくふる

なるかみの遙にひやくおとまきしていそげはあつしふかくさの里
 日暮るゝほど伏見に着く、雨には逢はざりけり、果して舟出せず、今宵
 はこゝに留りて、明日淀よりや乗らん、山崎路をや行かん、と心に思ひ
 めぐらす

さまざまにねもひふし見のかり枕ねられぬまゝに雨をきくかを
 時々うちふれど、五月雨は晴方ありと人々いふあり
 二十七日、舟淀より出づといへば、朝とく行きて乗る、乗合ふ人多し、夜
 舟にて登り下るよは、遠近も見えず、たゞいづく行くらん、舟人に任せ
 ていとれぼつかあきを、今日は晝なれば、八幡山崎より始めて、あるは
 柞原あるは蘆原やうのところまで、皆見遣らるゝからよ、いとれもま
 ろし、されど雨時々打ふりて曇るなり

あめをよぶ鳩のみねより、たつ雲はやがて降來るこゝちこそすれ

川の水は赤く濁りて、西の風強ければ、波さへ立騒ぎて、廣きこと海の如し

波たかみきれて流るゝうきぬなはいかなる淵に根ざしとむらん夕さり申の時ばかり河先よ着きぬ、陸より中の島に至る、日暮るゝ程なり、國の船五艘ばかり來居て明日出づるもありと聞く、いとうれし、さる中にも速ならんをとて、八幡丸といふ船の歸るに乗る、此船はかみの御船の内なれば、造さまも商人舟とはかはりて、いと高やかにいと廣し、船人も二十四五人ぞ乗りたる、されば風吹かぬ日も櫓もて漕ぐと云へり、年頃のゆきかひに船あまた乗りしかど、實は膝を容るゝもかたきこそ、船の中のすまひといへ、こたびはさばかり廣き船屋形に己たゞ一人乗りたれば、ぬるも立つもいとゆるやかにて、猶家よあるが如し、かどつ日荷物は皆伏見よ殘し置きたれば、身ひとつにて、夜

きるべき蒲團などもなし、いかゞはせんと思ふも、同く並びたる松尾丸といふ船に、金正院の阿闍梨山上大峰より歸りたまふが乗りたまへり、此わざり隔ちき友なれば、蒲團やある、貸したまひあんやと云ふに、蒲團は己こそ着めとて、大袖の厚綿入一つとて、給へり、夏なれば夜の物これにて足れり

山ぶしの苔のころもをかりそめよつゆの此身をやどしけるかな
二十〇九日、夜明くる程船出づ川口を離れて風かなへば、帆引かけて行く、午の時ばかり播磨の國舞子が濱近くゆく

松かけよやすむたび、人ひとめをとさへ開けりたのしげにして、此松原は見る毎にあかすめでたし、一度見ん人は得忘るまじきとてろなり

いづくとて松の千歳はかはらねど色のことにも見えわたるかな

茶店もまたよし

瓦屋にわらやふきませつくりたる濱のいそやのおもしろきか
未の時ばかり西の方かきくらしたれば雨よやとて赤石の川よ入り
て苦ねほひず餅すしちど買りに來しはしありて降りやみぬ又漕ぎ
出で、高砂まで行く此間雨いたく降りてやみぬ川に入りて苦營き
てぬぬ

高さこの川にねたれとよもすがらをのへのかねの音もきこぬず
六〇月朔日今朝猶曇れり人のいひはやす石の寶殿見よゆく此途雨に
あひぬ船のところよりは五十町ばかりありとぞいさゝか山に登り
て機の中切開きて中にいと大きく高く寶殿といふものあり下をば
水めぐれりさきに聞きては陵の跡あるべく空よ思ひしを今見れば
さとも見ぬずたゝ何の料ども量りがたし實に神代に神のなしたま

へりといふもうべありけり歸る道より尾上の鐘にゆくところあり
これにもと思へどひよりよくなれば船もや出づると心せかれて直
に歸來る船のところは歸りて湯あみなとすすべて此あたり打開き
たる海邊よて尾上の鐘も高砂の松もたゞ家むらの中にありとみゆ
たかさごは松と鐘とを殘しかきてみねも尾上もいつちゆきけん
隣岐高松ある某の禪師京ある相國寺にて逢侍りしを己よりは四五
日先立ちて立ちたまひしが己京を出でんとする二十六日よ三條繩
手にて逢侍りし此隣の船におはせり己が船に來まして何くれ物語
したまふよいと思ひかけぬ事にてめづらし歸りたまふ後其船にい
ひ入れたる

白雲のたちわかれてはまたぞあふたがひよ旅のあかすらよして
いつの世にいかちざりて高砂のまつとはあしよ君をみつらん

二日^〇げふはよく晴れたれど、風は西なりとて出でず、さのふ見残したる尾上の鐘見にゆく、道の程新はりの堤の上行くに、處々石の橋かゝりて、河水逆巻き流るゝさま、もろこしの西湖の畫の如し、打わたりゆくよ、やゝむかひ近くありて、彼石橋の上水のことす處どころ、にあり、船人に手を引かれて大方渡りしかど、今少しの處脛に及びて、水の力いと強ければ、まろびもどすると云ひて、己ひとり引返す、よべ河上のいたく降りけるにや、俄に水のまさるありけり、人のいふを聞けば、此わたるほどよ二尺ばかりも増りたりとぞ、かしく渡らざりけり、此河の名を今出川といふ

奥山はゆふだちまけりいまでがはわたる程よもまさるなるが、いまでがは水をたかみやたかさ砂のをへの鐘をみずてかへらん、船人を見よつかはしてたかさこの尾上のかねをわれやさくべき

曾根の松手枕の松も名高けれど、獨り成りぬれば行かず、晝ばかり船に歸りぬ

いざこよひゆきてやねまし手枕の松もこれよりちかしとぞきく、たまぐらの松やむかしの高さこの尾上のかねのことゑはしるらん、はるかにも響のなだやこたふらんをへの鐘のいにしへのことゑ、其圖をみるに、今はねろしてすゑたるなり、申の時ばかり西の風吹やみぬ、日暮るゝほど船を出して、汐につけて漕ぐ、此間にねにけり、やゝ寝覺めて見れば、追風にありぬと覺て、帆かけてゆく、今はいつく行くらんと思へば、室の沖家島エミヤのことゑありけり、さはねたるほどよ八里ばかり來にけり、船人怪き火ありといへば、出でゝ見るに、家島のあたり三つならびて燃わたるが、或は俄に沖の方に遠ざかりて見えずあり、あるは又遙に二つばかり現れいづ、いはゆる陰火といふもの

なるべし

波のうへにもゆる心はしらねどもあはれとみゆる火のひかり哉
三〇日、風いさゝか吹きて、終日船ゆく、夜になりて出崎といふ處に来る、
蛙多く鳴く

夜船こぎ出崎のせとよこざいれば千鳥よまがふかいつあくあり
汐の早ければ、のぼりかねて碇れろしてけり

四〇日、日の出づるほどより出でくゆく、風も吹かねば潮に任せて漕ぎ
ゆく、舂きたる米の盡きたれば、まだ潮はゆけど、下津井の湊に寄りて
米舂く、此間に湯あみし、あるきて東のはづれなる山寺に登りて海を
見やる、此寺に法師の書見るあり、何ぞと伺ふに、賀茂の翁の新採百首
といふものなりけり、机の上に歌の題ども引ひろげて、歌もよむとい
ふふりあれば、心にくゞ覺えて、しばし傍に休らひ物語れば、友なる木

下幸文が門人なりけり、さらば同じ道にこそと、猶何くれ語らふに、己
が事悉くいひ出でられて、すべり出でくにげ歸りぬ、日暮れて漕ぎゆ
くに、風西に成りて船進まねば、水嶋といふ處に泊る
五〇日、猶水嶋にあり、波風よべの如し、島にあがりて見あるくに、色々の
花さき、小松生ひまじり、葛かつら這ひ廣とれり、人の家めきたるもの
一つふたつあり

淺茅生にさゆりあでして眞菘さくしまの岡べをひとりみるかな
くづの葉のかへるにつけて故郷の小松がもとをれもひこそすれ
しま山のをか葛の葉かへれどもふねはかへらずにし風よして
風あらし波はたたかしたればつかなしまの岩根のあでしこのはあ
六〇日、風は西なれどしひて漕行く、白石といふ處にて晝飯たぶ夕さり
又行きて、やうく鞆の浦に着きぬ、此間神鳴り雨いたく降りて、船の

中ひたぬれに濡れぬけふよりは此浦の祭ありとていと賑はし祭
 る神は祇園の大神あり京とて同じく明る七日いでましありて十四日歸
 らせたまふとぞ宵祭見んとて人々と共にあがる此處よ鄙びたる花
 廓ありあそびども夜店はりたるを見あるくに女ども入らせたまへ
 とて引とむればしばしはうきに休らひて皆人歸らんとせしを其女
 のいはく何もいはずれきをのりて行きたまふもの哉といへり土佐
 日記の舟歌に謠へる古き詞あるをかゝるいなかには今もつかふも
 のありけり此詞ひとつぞ耳にとまりて興あるさて舟にて食ふべき
 ものなければ何くれと求めあるくよ魚はあれどさうじものなし奈
 良漬の瓜やあると問へば銘酒屋にこそといふ銘酒屋に人を入れて
 いへば又なしと答ふあれど夜なれば賣らぬなるべしさは此あると
 知らぬ人にもあらぬを賣りてくれぬいと憎し己と知らねば又罪

なきに似たり小家に行きて梅干十ばかりを求得たり

七日二里ばかり來て田島といふ處に留る潮も行き雨風もさばかり
 あらねど舟人漕がず怠りたるなりけり

八日よべよもすがら波高くて舟の中寐がたし雨も時々に降る今朝
 舟人等又雨にかこつけて漕がず米を舂きよ行く蜈蚣を飛脚に遣し
 たれば足毎にあゆひすどていと遅かりきといふ譬あり今此船水手
 の多きを頼み速ならんと思ひしは己が誤かりけり馬かた乳母に並
 べて舟人をぞ心僻みくねくしきものには云ふある抑月を計り風
 を知りて恙なく速あるを船人の任とすれどさる業うまく得たるは
 いと稀なる中に此船の頭とある人どもは君よりそれと立てたかれ
 て長く祿をしも賜はりたれば中々に心たるみてやさるたしあみは
 れろそかなりけらしされば乗居て漕ぎとむる事も人の舟皆行くを

見て纜を解き、碇たろすを開きて、梶をめぐらす。夜は大方得漕がず、朝もとく得進まず、かへりてはやてに逢ひ、急雨に追はれてたしなむめり、かゝるえせもの、癖として知らぬ事知らぬとは管ても云はず、従ひ習ふ事はいたく嫌ひて、却りて人をのり辱めんとするからになづき従ふもの一人もなし。漕げと云へば漕がず、押せといへば押さず、たゞ日よりをのみ悪様にいひなして、幾日こそ降らめ、幾日こそ吹かめ、あと心にさはり胸よふさがるやうにのみ云ひあひつゝ、すこし天氣穩に波靜なれば、島にわがり磯にわりて、米をのみ替くなりけり。此者ども此舟に乗居るほごは、百日たつとも米と錢は官より給ふなれば、まばらく舟をいざよはせて、世渡のかせぎを休むに似たり、かくあばき出でたるは、あまりに船の遅きを憤れるなりけり。大かた人の世にある、道知らぬ限は、事こそかはれ、かゝる僻める心もなかなからさ

らん、さるをもさらぬふりよしなし。いひなすとはいつれ罪深からざらん

おもふにはかはりのみする世中をこのころ浪のうへにみるかゝる未の刻ばかりやうく漕ぎ出で、大濱に至る。此時日暮れんとす

山あらは足はさくともあゆみてんいそぐかひなき海のうへかな
おははまの入江は波もさわがねばふるある雨のかずもみねけり

こよひ雨いたく降る、夜半ばかりやみぬ

九日、今朝雨ふらず、碇とりて漕ぎゆく。三原を過ぎて、高崎に泊りて、沙まちす。午の始ばかりにや雨いさゝかふる。水手ども蛤拾ひにゆく。己もそこらあるきて、畑ある木瓜五つ求めわて歸る。蛤を煮、瓜をそへて、晝飯たぶ。未の刻ばかり又沙よ任せて漕ぎゆく。夜に入りて横嶋に泊る。夜半ばかり又西風吹出で、松の音波の音いと高し。雨もいさゝか

ふる

十日、日の出づる程横島を出で、小坪に至る。けふも風はかおはず、午時ばかりなり、申時ばかり小坪を離れて、酉の時過ぎて隠戸に着く。湯あみして船に歸れば、空なごりなく晴れわたりて、月木の間を漏りたり。此景色心にとまる山陰あり。

十一日、夜明くる程皆れく、こゝよりは十三里の道よて、いと遠からねば、人皆歸らんことを思ふにや、さすがに起立つことも早し、されど瀬戸の汐をほらねば朝飯たぶ。

なみの上はまだあけはてぬ島陰にあきたつ蟬のこゑぞきこゆる。此瀬戸をいづれば追手にて、げふは船よくゆく、人々喜ぶ。巳の時ばかり屋形名といふところに来ぬれば、風に向ふ、これより帆をつぎて漕ぎつゝ、午の時ばかり嚴島に着く。此頃市立とていとにぎはし、されど

假屋のみ立續きて、あたらし景色とそこなふこゝちす。御前に詣り、大元の御社まで行きて、船より歸り、汐のなほりを待つ。申の時ばかり漕ぎ出で、歸り來るに、すやのあたりより月にありて、いとおもしろし。室木の湊に着きしは夜もふけたりき、かく歸着きておもへば、上下のあるかたちもとく聞かまほしく、家こなりて待つらんも量られて、今宵歸るべきに事定めつ、人々は皆いふ、夜はいたく更けたり、道も二里に餘れり。山に濱にいとたどるゝを、明してこそあがり給はめと、已例の聞かず、知らぬ道にしもあらず、夜こそ人の見るらんこともなくて心安けれ。たゞ獨歸るべしとて、提燈ひとつ借り、小蠟燭二つ添へて、提げられたつ、月はや入方よ成りて、雲出來つ、雨はふるべくもあし、濱づたひたどり行くに、入りやはてにけん、いと暗くなりぬ。ゆきくゝて道祖峠サノダテにかゝる、蠟燭さしつぎてと物するに、皆提燈の中に入れねさしかば、

火の氣にとろけて用ひられず、今ともしたるは僅にありぬ、此山路にて消れたらましかば、跡先ともに行くべからず、もとより求むべき人の家もあし、いかゞはせん、よしや消えたらば、そこにてこそ明さぬ、夜も曉程あらじと、いち足を出して走り越ゆ、暑きこと苦き事限なし、さすがに高からぬ山なれば、火のあかりある内に越果てたり、汗れし拭ひ、息つきて、これより錦見ニシミの里ある中村のをちが門叩きて、諸の事きゝ且語るほどに、丑にもなりぬめり、家に歸りて又門たゝくに、ふつに起出でず、我家なれば戸押放ちて入る、老いたる母女子皆起出で、目をすりく、喜ぶ、下女をよく寐たるを見れば、此春のにわらず、なきまに代りたるなりけり、さて聞けば、なくなりし人も少からず、生れしも多かるべし、よき事あしき事、しばしが程にも彼是ありあふものなり

世中をあはれわなうとあびきつゝ、あがきいのちをなに願ふらん

とも云はるばかりの事あり

世は廣し人のうへまでいかいせん我身うからはまづつゝ、がなし
あといひて、まだ明けねば寐ぬ

明治三十五年六月十八日印刷
明治二十五年六月二十日出版

版權
所有

編輯者

井

上通泰

東京市下谷區徒士町一丁目
二十五番地

發行者

江

草斧太郎

東京市神田區一ツ橋通町
七番地

印刷者

田

中正造

東京市神田區柳原川岸
第十四號地

發行所

有

斐閣書房

東京市神田區一ツ橋通町
七番地三號地

發賣所

有

斐閣雜誌店

東京市神田區一ツ橋通町
七番地三號地

各府縣大賣書肆

東京日本橋通一丁目
東京京橋南傳馬町
東京日本橋通三丁目
東京日本橋新大阪町
東京日本橋本町
東京日本橋若松町
東京神田表神保町
東京神田美土代町
東京神田表神保町
東京本郷一丁目
大坂東區本町
大坂心齋橋通
名古屋本町
大坂東區備後町
信州長野
靜岡甲府
大坂北久太郎町
大坂備後町
大坂安堂寺町
京都寺町
肥後熊本
京都河原町

大倉書店
日黑支店
丸善書局
小林喜右工門
杉本七百九
神原友吉
東京堂
東海堂
武藏屋
中西屋
國屋
有終社
岡崎真七
三木佐助
川木代助
吉澤平助
西澤喜太郎
五原明堂
柳原喜兵衛
梅原龜七
青木嵩山堂
田中治兵衛
長崎次郎
大黒屋書店

桑名本町
鹿兒島大日町通
山梨縣甲府
金澤市尾張町
博多
富山市四十物町
富山市四十物町
靜岡市馬場町
東海道沼津町
遠州濱松
出雲
京都南新町
神戸相生橋
肥後熊本
岡山市西大寺町
肥前長崎市
越後高田
信州松本
仙臺市同分町
宇都宮大工町
越中富山
名古屋鐵砲町
名古屋玉屋町
越前福井

右田次兵衛
吉田正兵衛
抑善根堂
雲根支店
中田支店
清源堂
文源堂
關源堂
齊藤源三郎
盛利春堂
便利堂
熊谷久榮堂
おせしや新開鋪
武内彌三郎
安中半三郎
室直三郎
水本音四郎
山本音四郎
内山港三郎
磯野小兵衛
三輪文次郎
片野東四郎
品川太右工門

賣 捌 所

東京神田區表神保町
同本郷區元富士町
同京橋區彌左衛門町
同芝區三田一丁目
同同區三田同朋町
同同區三田一丁目
同本郷區元富士町
同神田區錦町二丁目
同京橋區出雲町
同芝區佐久間町一丁目
同芝區愛宕下町四丁目
同京橋區銀座三丁目
同神田區小川町
同同區鍛冶町
同京橋區尾張町二丁目
同本郷區湯島天神町三丁目
同日本橋區小網町
同同區飯田町
同神田區表神保町
同牛込區香町
同芝區柴井町
同本郷區本郷四丁目
同日本橋區濱松町
同牛込區神樂坂上

青柳堂
盛春堂
嚴鳴書店
福田書店
岸田書店
書明堂
解明堂
真田屋甚七
山田屋甚七
粟原書店
飯田書店
山本益二郎
大塚書店
吟松堂書店
佐木書店
改進堂
信文堂
洗心堂
敬業社
活神堂
國盟社
文審堂
安田書店
正學社

同同區通寺町
同淺草區北松山町
同本所區相生町五丁目
同京橋區銀座四丁目
同南區原郡大森南原町
同同區三番町
同芝區三田同朋町
同麻布區飯倉三丁目
同日本橋區本銀町三丁目
同芝區琴平町
同同區南佐久間町一丁目
同日本橋區本町貳丁目
同芝區櫻田本郷町
同同區同町
同同區同町
同麻布區長坂町五十一番地
同同區櫻川町
同同區琴平町
同赤坂區田村町三丁目
同同區一丁目
三重縣津市大門町
函館末廣町
京都寺町五條北入町

深野書店
珠水屋
見珍堂
信文堂出張店
平林新平
日成堂
芳田書店
岡田書店
大西書店
新盛堂
安井文欽堂
庭花堂
萬松堂
小出書店
鈴木書店
旭藤書店
齋藤書店
萬春堂
藤湯堂
梅田書店
開進堂
河島九右衛門
愛新軒
飯田信文堂

68
277

賣 捌 所

同佛光寺通鳥丸東へ入ル
同寺町松原南へ入ル
同油小路北小路上ル玉本町
同東區瓦町四丁目
同博勞町四丁目
岡山縣岡山西大寺町
横濱縣天通三丁目
同本町
同太田町二丁目
同同町三丁目
高知縣京町
同元町五丁目
同多門通二丁目
上州新田郡本町
埼玉縣熊ヶ谷驛本町
埼玉縣浦和宿妻門
同八王子日町
同大宮驛
神奈川縣横須賀
同小田原驛町
秋田縣南秋田上通町
同秋田市酒田港
仙臺市大町四丁目

東校律書店
改進書院
興教書院
中村峯雄
平井新聞店
西崎友次郎
神之屋
日之出屋
萬理商會
小島屋支館
船井新聞館
島新聞館
西村鐵藏
近村榮堂
中村朝二郎
熊澤傳四郎
三育社
武田吉次郎
石木審堂
鈴木善次
白崎善助
木文商店

富山縣富山市上リ立町
福井縣福井
福島縣岩代郡山
同盤城白河天神町
新潟縣新發田
同三條町
栃木縣宇都宮池上町
同栃木區町
同足利町五丁目
群馬縣前橋連雀町
同高崎田町
千葉縣千葉
石川縣金澤市
同加賀大聖寺
長野縣松本本町二丁目
同同町一丁目
同上諏訪桑原町
同長野市本町
同
羽前國鶴岡五日町
同同荒町
愛知縣名古屋市
同同

福田清明堂
岡崎佐喜助
櫻井元吉
奥村書店
時事堂
樋口屋
手塚祐次郎
上原與平二
三原泉堂
報告堂
文心堂
立真會社
寄々堂
野世舍
高美書店
松新堂
日新堂
長田采五郎
相場書店
小池藤次郎
活眼堂
耐成堂
金耐號

